

寶東古錢錄

七



關東古戦録卷之七

目録

一 足利大郎畿内国游あしかが たいらう 畿内 くに ぶら

附 受領并 濱田五郎事うけつり ならび はまのた ごろう こと

二 山形八郎出羽國に之騎射事やまがた ぱちらう 出羽 くに に 之 騎射 こと

附 危難に逢事あやふし げん におひ こと

三 長尾為明討畧那須勢敗軍事

関東古戦録卷之七

足利太郎 畿内周游 受領

并 淡田五郎事

去程に足利太郎ハ長尾為明ガ勸ニ由りて母公に服乞あ  
つて原根本を始として留主中の志満り念曉よおれを令  
ト長尾城戸主人を召集し下部三四人と密に出立向り旅  
途についで沼海の小川廣原硖海長尾一くに指して備の  
配り陣營の掛やう。素兵の備細に熟り候。早蕨徳海に出  
る時越後の志臣宇佐次河守京浩より帰國にて人数を  
伺とめて通りければ三人片陰にありてこれを見るに帯  
の切ぬと云へた。人数の列足並を携へ誘致尾一連して  
其智謀正にいちぢる。既に宇佐次が馬主前に至ると告



ぶゆいりてまゝゆず長尾ハ川と心付て。急に右馬を押隠  
 せバ。宇佐兵が馬えの如くに進行。駿河守ハ川と見やり。暫  
 馬を立けるが。さりげなく糸出でて。遙に行過ぬ後に駿河  
 守近臣に語りし由。馬進ぶる時よあつた。一人の男其主  
 人と。實ハ此を隠し。馬定えに腹と。時我を見を伺ふ  
 に。彼主人の政上。に一條の白光有て。吾眼を射る。殊更其人  
 の士ハ威儀堂々として。智謀を深し。眼光青天ハ徹と。双  
 の智者也。今一人ハ勇猛義氣。英風。酒勇に現る。天下の奇  
 物。吾いほごうくの如不剛の微ある者を見と。其形相。東國  
 の人あり。百一彼等物をゆ。誰か歎するとをゆんや。終ハ  
 主君大業の妨ともあるべし。ちとぞ。糧藉に事。をて。切捕  
 んと思。が。英士の窮寇。恐くハ。人教多く損と。べし。且川人

るの盛衰ハ天ハ繋れり。吾亦捕らず。其命救極り。あつハ。彼軍  
 大業をあると。あつハ。百一天命彼にあつハ。吾亦亦取とを  
 不為。怒に無道の働を。さんハ。勇士の恥る所ありと思。止り  
 一と云。長尾ハ。物を見送て。危哉。吾曹已に。宇佐兵が手に死  
 せんと思。が。誠。に。君ハ。天授あり。城戸其旅を。回ふに。長尾。吾。今。宇  
 佐兵。馬を止。一時。已に。君を討ん。の。命。を。あ。つ。れ。り。い。を。思。ひ  
 車。と。ん。何。事。か。つ。ま。ハ。正。小。幸。あり。と。悟。り。て。夫。より。英。漢。海。を  
 越。す。京。洛。に。入。る。に。つ。る。戦。國。の。名。と。云。ハ。山。川。清。ら。ん。人。品。亦  
 郡。あり。京。都。に。偶。居。て。暫。く。滞。留。ある。固。小。志。づ。く。酬。諱。あり。と  
 云。ハ。其。長。尾。あ。ら。じ。め。謀。て。危。難。を。さ。け。彼。是。と。心。掛。れ。た。一。人。倡  
 べ。し。英。士。も。あ。し。或。時。長。尾。ハ。下。部。一。人。を。石。連。て。搦。及。取。り。  
 却。よ。ハ。太。良。主。從。日。々。名。山。川。を。馳。て。其。景。色。を。樂。む。一。日。東

山に遊覧して、故小酒屋に入て休らう。此家即ち娼婦まで  
 其女お酒あり。城戸んに思ふやう。主君旅途の艱難當亦  
 甚し。幸長尾もあらざれば。妓女を呼んで一宿の真を借ん  
 と。太良に勸るに。夫よ寝て醉にきて。老婦を呼んで妓を招ん  
 とをさふよ。領事して。あ人を伴て。先其妓を見せしむ。主従  
 見送て座にゆり。太良も婦にきて。田多の眞女らも應ずる  
 か。真の一層に花枝を擡ぐ女に。應せり。あれをゆさせ  
 よと。あれは老婦を呼ばり。あ家人の娘まで。三好どの  
 此方へ進み。妾にゆい。る若あり。ば外の女ハハハ。さあり。夫  
 とさふに。太良不興して。彼女よあらざれば。あも外に望み  
 すと。事いられ。城戸例は。伴て。太良に吞す酒せて。別の妓  
 二人を招て。興を催し。勢く。醉をきて。床中に入て。城戸あ人

の妓を招て。主人の心彼娘にあるとを語り。母らあ人びと  
 をよく取持さ。バ。母心の怪に。おとと云々。さ。き人の  
 妓の回。誠に主君ハ。さ。が。逢なる人にあら。と。事。に。先。にかの  
 娘主君を。バ。情。既。に。逢。ら。り。必。事。あ。ら。ん。然。た。た。あ。る。時  
 ハ。さ。く。い。う。る。政。に。う。逢。人。君。軍。謀。る。べ。し。と。云。き。人。回  
 くれ身を捨て。主君の心の怪に。さ。ら。ふ。る。と。これ亦君に頼  
 ありと云。城戸大に。候て。新。事。ゆ。ら。バ。何。事。の。望。み。共。そ  
 む。う。と。云。に。い。妓。候。て。然。ハ。け。事。成。就。して。後。君。亦。これ。を  
 以て。承。く。事。と。さ。き。べ。し。と。云。に。城。戸。誓。て。お。れ。城。う。け。け。ひ。  
 あ人の女の。さ。り。にて。此。夜。太。郎。彼。娘。と。逢。逢。て。情。愛。狂。り。に  
 ぬ。く。ま。り。主。従。他。に。出。る。に。心。す。く。救。毎。に。な。に。止。宿。せ  
 り。十日餘に及て。老。婦。事。を。悟。て。強。く。彼。娘。を。攻。れ。大。恥。恐

れず自ら命を捨てば人小憐れなり。死目も兼て苦痛あり。元  
 来自らあり。未だては契縁あり。なれば彼人に死せりと。  
 女も己るにせむ。癖をけむ。老婦も一先去れをせむ。  
 太郎に逢て後破せんと。生布へ来る。小波解して。床中に何  
 だ。おた。厚風を掛け。白光床中に満て。眼くらみ。結く。それ  
 太郎。改上より。一條の白毛燭くと。あう。それ。う。老婦。尋  
 ねて。覺と。色を上る。太郎。夢さめ。起これ。老婦。平伏  
 して。君ハ凡人にあらず。彼娘ハ。止家の息女。され。大。ま。家  
 貧。縁にして。某を頼み。三好家へ奉りて。ま。謝金を分川。約束  
 あり。然るに。予。だの縁に。あつて。君と。相馴て。死を。極て。我  
 言に。従は。せ。是に。固て。君の。心を。引見んと。来り。みるに。不。思  
 儀。何よ。者。と。べ。う。と。是。天。縁。あり。娘。成。君に。ま。む。ひと。人。に

金錢を。終て。ま。家。成。み。川。か。ハ。後。難。ある。魚。う。と。ま。後。君  
 時を。ゆ。ハ。必。老。女。成。見。終。め。い。ま。海。と。念。以。に。述。け。れ。ハ。老  
 郎。甚。恨。む。あ。つて。その。盛。の。贈。物。ハ。ま。さ。に。か。す。べ。し。と。  
 う。け。ぐ。ひ。て。是。より。悔。む。可。ま。く。彼。娘。と。晝。夜。歡。楽。を。盡。し。て。  
 大。業。の。と。も。心。に。既。に。磨。せ。り。城。戸。折。ぐ。凍。む。と。云。も。是。又  
 若。年。の。情。奴。女。の。貞。心。に。か。つ。と。う。う。く。と。て。世。目。に。あ  
 悔。ま。り。長。尾。ハ。播。忍。に。所。有。て。ト。り。相。識。の。民。人。富。貴。ある  
 に。使。り。て。旅。利。の。金。を。調。へ。後。朱。軍。用。の。事。迄。相。約。して。京。都  
 に。ゆ。れ。バ。旅。者。に。ハ。下。部。一。人。あ。つて。は。る。太郎。并。城。戸。行  
 跡。娼。家。に。日。夜。送。る。と。成。具。に。ま。れ。バ。長。尾。大。に。恨。を。け。し。  
 坂。東。の。人。ハ。極。て。剛。に。し。て。京。洛。よ。来。れ。バ。婦。人。の。為。に。精。神  
 を。こ。ろ。す。と。古。今。一。致。あり。何。者。の。狐。狸。ウ。世。怪。を。か。ま。と。

弛りて刃れハ主従酒宴の興を催て歡樂の折くつたれば  
 長尾係に工支を廻しけりけりやぐ席にひりき酒宴真  
 あるくを某も碎を承るゝと並に盃持把て三献を傳れハ  
 太郎主従為明を刃るより疑霧忽ち晴て慄慄きりに至  
 て低頭して詞を。為明此時女原を遠けて次才成るん  
 城戸指添を扱て後に突立んと急に押止れハ涙をなが  
 し先生播忍へとりて後主思へ一時の真城を以て旅途の勞  
 を慰せんと某もめては歡ををし竟に旅用を室し折く  
 諫るといへとも某亦情礼て共々大事を思し飛死に當れり  
 故に自ら刑すと云へハ為明笑て大行不顧細謹大文支興  
 をとらハ正に如はるべし。恥る所あらんや何そ一命を  
 為んやと心をやもらけり靜に理害を説けるに主従感

伏して始終のあや成語りければ長尾娘の氏系を問てこ  
 れ事ありと老婦に金をとらせ直に太郎を傳へいと其  
 家に至り其姓氏を語り息女の始末を語みいぎとて百  
 金ををとりあるにその家甚悦あひ殊に太郎の人物を賞  
 し始て聲舅の約ををし足利義晴の引合んとあるを為  
 明諱して當時の柳子京師にありて武功を立るとありハ  
 一。回國へ歸て後宣披病ある聲と答けるあを其ことハ止  
 にける舅家の名持にて太郎任友ありて從五位下京  
 亮義連と改名あり追て坂東よりの住進にありて官領の  
 勅許あるべしと約して旅宿に歸京都ハ若き將の久く  
 止る所にありすとあれより旅立ま度して奥方ハ追て  
 迎を差登さん久一所に旅行あらんと評義言中言か

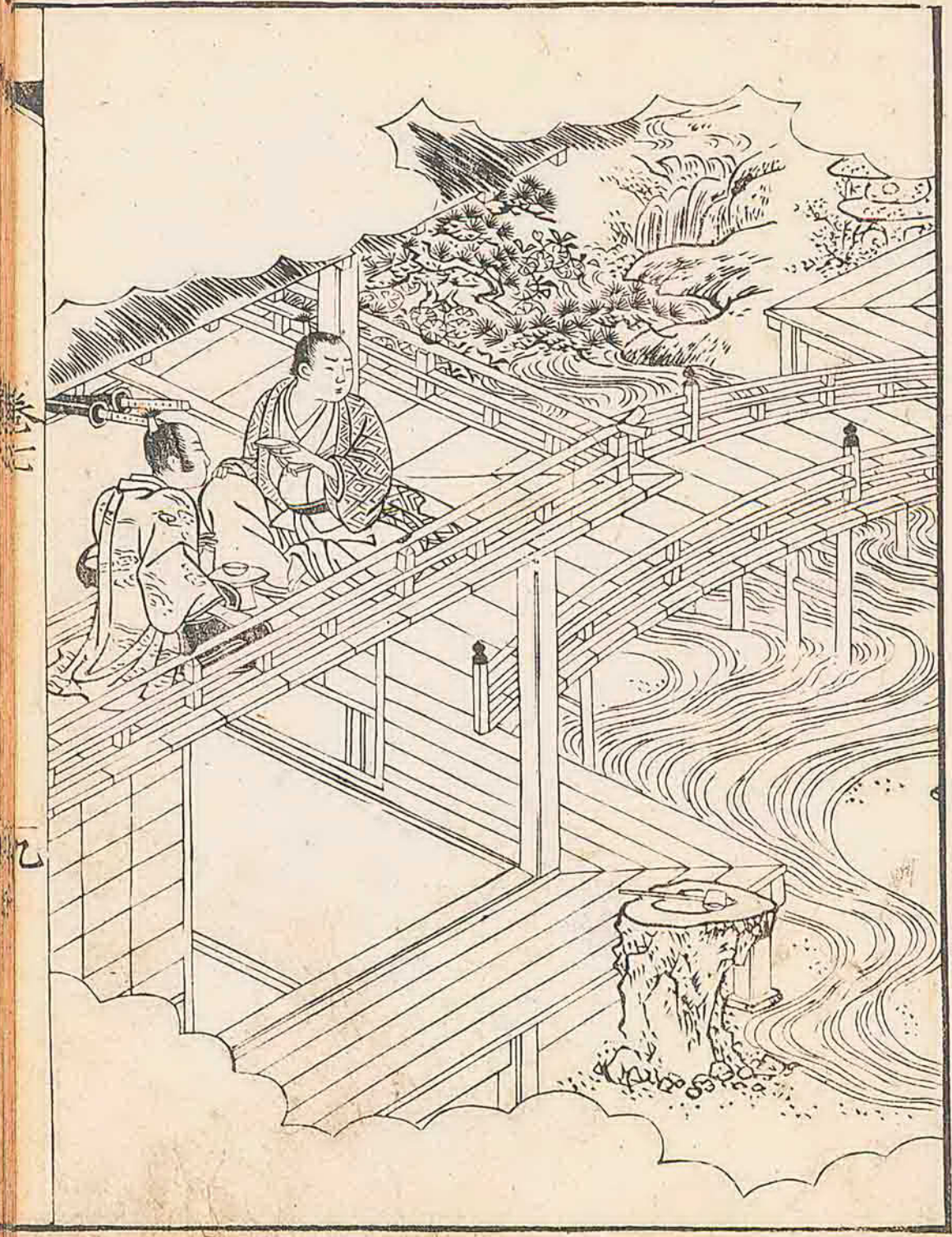
るくか。泉芳主税有馬一所用あつて父の名代として上京  
 し月連して帰海立寄つて無事を尋ける。義連大に悦みの母  
 公の無恙を問ふに其より奥方のこと漸次ありけれ。安く  
 と更命某洲供仕れば危し。陣に先達て飛狩を馳せ霧  
 波を途陣と運に振き申へし。事上るに為羽手を捨て手  
 伝跡る所をしと賞賈し。驚れはくろひ。城戸が事せし。故も  
 金に替て乞うけ。櫻をくちくして。義連出立の前日に。英波海  
 へ掛てさうりける。儲しも長尾五急て。京都をお立て。東海乃  
 にさうりくま。小國と風景始り。場廣にして。勝負のくけ  
 變亦小國と差異あることをさし示て。尾州に掛て。長尾を  
 を考て。夜に必ず。覇者起るべし。松共恐に。さうりくま。と。それの  
 ある所を示し。まより。後くと。急行。豆丸を越て。箱根に掛り

山中を押し進むに。数十人の獵師。迹さゆらうて。或ハ木を攀  
 岩るに。隠れ。かんと。まとい。う。か。る。故。と。見。て。あ。れ。ハ。年。古。獵。手  
 を。負。て。岩。石。城。を。み。ま。す。木。の。根。を。かり。真。を。怒。り。し。近。來。る。是  
 はん。諸。人。の。怒。る。ま。う。ん。と。主。匠。岩。上。に。登。て。居。る。所。に。一。人  
 の。獵。師。横。命。より。欠。空。て。手。負。猪。に。む。か。と。組。替。く。採。命。か  
 ら。ん。は。く。猪。を。ふ。み。倒。して。大。勢。を。振。て。擲。り。上。方。に。か。き  
 勇。氣。の。働。義。連。感。心。あり。て。声。銭。け。と。い。う。に。獵。師。逞。き。力  
 量。山。中。に。朽。果。る。ハ。可。惜。と。也。我。に。位。へ。を。侍。と。して。百。つ。り  
 ろ。ん。と。ま。ふ。に。彼。獵。師。お。笑。聲。公。を。さ。る。に。ハ。あ。ら。ぬ。大。力  
 に。増。も。人。あ。ら。ハ。仕。ん。と。思。へ。共。只。今。追。我。に。敵。む。る。者。に  
 見。せ。と。初。る。を。次。良。太。郎。侍。と。声。け。岩。上。より。飛。を。り。て  
 カ。ら。ら。べ。の。望。あ。ら。ハ。ま。れ。命。を。と。る。べ。し。と。押。止。れ。ハ。ふ



里多あり物なきなる人こそあれ先試におれ持多くと四  
 十貫目もあるべき石を煙くと引上て差出せハ城戸突て  
 片手をひておれを誘とりぬり廻して大地にをく彼男大  
 に驚き志くらバ角力にて試んと大手を廣て紐付を思の  
 傍に抱くせし片手を伸して帯をつうんて引上れハ流石  
 の彌師お是地を放れて猿をつらせし如まてかこころハ  
 と投出せハ起上て平伏し君ハ日本一ありといふに城戸  
 打突て我友に一色太尉お弟門と云者お某う如き者三  
 人掛れ大驚に務ゆるとまじと云へど倍威伏して義連の  
 后下とあらんと云ふ姓名を問へど云浦家の浪人演田お  
 良と云者也、竟お君臣の約を承して竹符紙あこハ城に  
 君の起る所ハ東國を相忘せり英徳ありして吾人の英士

を見ぞ相次に入れて一力士をゆくりと為明候て山を下り  
 小田原の入口よて五良ハ暇終て町奉行ハ集會せんとな  
 小田原へ来れハ城主氏康上及へ後向のよりこれ憲政  
 故亡の時全れアとをれあり武藏に編りたを急三十月に  
 及て上及へ君おへり書尾ハ直に下野に至り義連の鎧定  
 て馳来らんし物去れり母公真奥と大に悦喜あつて  
 互に無事を語り一色惣堀相侍も熊谷堤の東小幡地お  
 いて鎧脱に出来せりと嘉浪をひて申越たりとありけま  
 ハ義連大に悦喜ひ目を撰で秘使ある母公真方ハ興多連  
 ハ馬よきて城戸次郎太郎を始嘉浪ハ下義勇の士十五騎  
 前後を因てお外我黨數百人所侍也一色太尉お遠門等  
 塚熊太良奉立と出迎に出たやうに鎧を入りぬハ義連



柵塚を圍て長尾方使首を命じ山形小楯鹿嶋にも早々  
集令をせよと云き松にねを初くとありけしバ柵塚に畏て  
下野の國へ急けり

山形八郎出羽國に之驍射事危難に達す

出羽國山形の城主ハ代々山形出羽と号す當主英明に  
して奥羽を春の氣を去れりて城外に乃場を立て  
天下武藝の達人武者修治する者を夜に養て家中の志士  
と其業を試み猿を石抱へばバさふを碎くをむこ  
れ小國て武人此地を以て晴業として往々に集り来ると  
之へたを藩士に勝とありて取をとりて去る者多し惡  
典膳との角る劔術者其業務れ諸士も又貴族も暫く之  
に滞るぬ山形八郎季照え來當家の氏族をれた父祖狼

級して珍異に沈淪を生て容顏いづくことをやうに  
て自ら風流を以て捨るに不通の大力をて殊に弓馬の術方  
人に勝る曾て我連に伝とるつと長尾の明に固て忠義の  
英士あり此地に來て不用を洞業以て英士を求んとて  
乃場に至ると云へた云形相如人の如く溫和寡言なれば  
只其秀藤を稱して其業を知者あり或則典膳諸士を集  
て其業に慢しおとろく十間を隔てハ右の楯人為期うり  
劣ありたを矢を切打て方に立るとあるべうとてと虎言  
を吐ければハ即これを圍てあら弱き河をなぬ大具に  
遠近の業あり人に功拙あり劍を以て槍に勝んとするべ  
に術者の取る所あり况弓と相對せんと言ふると云に其  
業を不知に似たり某弓馬強くをせた槍劔の術にたり

弓を以て相對せハ吉の泉の小次郎。此以索ありた只一  
 劣の下に命を止ん況や後世の士をわとあてく〜云  
 放せハ典膳甚怒りて論無益あり立合ふて雌雄を決せん  
 と云ハ即笑て足下狂言なり我ハ第一射斃とも身に害を  
 く足下ハ一箭に命終ん然ハ無用の犬死にあらむやと云  
 に典膳きこふと其外の諸士もいづて典膳危とあらん  
 と色々に言れハ八郎も控方をく強きハ始よ約すると何  
 也只切折と切折られどとの争あり。索に足下を對射ん  
 もせんや。志うす矢杖輕根を丸めて手心を以て放さ  
 ハ身に中に害ならん跡にて弓勢ハ別にあらハ中べ  
 と諸士に理害を後て既に立りられ典膳木刀引きて眼を  
 配て立る有根實に勇猛の勢あり山形も弓と矢取拵て

志ゆくと立向。間十間にして典膳いざと色うくれハ八郎  
 急しりと切て放て電光より控早く御板にハと伸るつ  
 つけ板に七八奉同一矢坪を射も不遠射をくめりされ  
 大蛇の洞の如く矢中に女も痛を啗々大に感せれハ典膳  
 打笑て弓矢うろく小弓の調子ある故小かくの如く。万一  
 身に立程の矢ありハ何条切落さすと云と子うんと。女  
 も屈せず晒へを。諸士一同にハ郎の弓勢の程あら〜心  
 まといふにハ郎心得り〜と典膳へ射掛し矢をつうハ側  
 の大石へ引志がめて切て放せば矢ハ流星の如く青目の  
 石へ射れと通り羽際と射のり。弦を断る音を吐て  
 俄に古今の弓勢と一同に感責せれハ典膳も心大に屈を  
 れハ空啼て立りしが亦立上て弓術をぐれ〜と云

先手結に之のてをあくど歌に討れむハ武の不心掛と云  
 つべし多とハ我角の如く流きて正面より打掛らハ足  
 下いかに働んやハ郎風より流きてりとして何程の事かあ  
 らん亦真向を打れんと女も撓すよとゆれハ典孫ゆより  
 とゆつゝくらに打掛るを引強くてつと入大の男を引  
 搦んと一二番投出せりこれかん長尾の傳し奉法の術を  
 り典孫の如くに起より家早是迄ありと亦死掛るをハ  
 良弓を引がけて正面に射向ハ神書の如術を引  
 當て典孫をよめてすよとよみになりぬ諸人中に立て彼  
 是と取つくらハ和流のて其日ハ海ぬあれより典孫ふ  
 くく如く思て仇をよむの心生じたり去程に家士始て  
 八郎の術を見て音をふるハ物奉りに達して城主これ

を圍むハ騎射の術を一免せんと荒本内苑と云る家老に  
 命じけれハ荒本八郎を招て生國氏系を尋るに即主人の  
 氏族内縁甚まうらざれば如受丁寧に管應し目限を招て  
 其術を見物ある棧布を搦へて城主一族をた右にむきハ  
 て堂一のハ太手の方へ扇を下して奥方の見物ありて  
 れより徳家の見物整固列を平百世名の馬場にハ的を  
 立既小利限にされハ山形ハ扇書照緋名城の狸射書を  
 を引白絹の袴着して態と甲ハ着ざりける既く及の矢毫  
 に重森の弓を横くハ荒本が仕立るる奥お約の里毛に  
 て太く逞きに唐靴かうと静くと糸出せし有る内容能  
 潔小して眼さ常るらず先馬小場をあらうん福地あり  
 をよす人馬相應して一絆の如く二三通案横し色を掛て

逸氣に逸出し、弓取て引加へ、射出せし矢的の支守を費さへ  
 後八中おどろきあへ、あつくと、素直きハ城主始一同に感賞  
 暫く止むとあへ、それより里に任せ川、弓馬の術のある  
 所なく、業を盡せば、日本一の名人と、知も不知も、莫者を以  
 城主席を改めて、北面あり、念以に挨拶あきハ荒木側よりモ  
 系氏を述べ、城主大に驚き、あつと、色を祝き一族たり、荒  
 木方に滞るある處くと、種々の賜物あり、諸国の儀物あり  
 く、荒木に命じ、これよりハ郎荒木が書院、一回成居而  
 て、密に英士を求ける、翡翠ハ胆を以て、其身を害せ、ハ郎季  
 照武術の達し、するの、も、ならず、次藤並る、く、割へ、和方の乃  
 に加へ、あへ、風流の英士あるれば、一藩の婦女魂を、お、人の  
 て、俊を求て、絶書敷通にあ、あ、なり、ハ郎男を、心、く、密に、あ

れを荒木へ達し、聊も念に引る事なし、爰に、荒木が娘あ  
 り、尚年十七歳、艶容花を、む、あ、へ、心剛に、情深く、時に、ふれ  
 折ふ、あ、めて、ハ郎を、刀、深、慕、慕、の、さ、づ、か、頻りに、至り、偶武家  
 の、娘と、なり、夫に、従ふ、と、あ、ら、ハ、季、照、の、め、さ、こ、そ、誠、小、文  
 武の士なり、あ、と、い、事、不、信、して、死、せ、る、と、も、吾、志、願、を、達、せ  
 ん、と、文、と、あ、く、と、徳、て、ハ、郎、と、あ、ら、り、互、出、る、と、き、袂、へ、投、入  
 たり、書院へ、ゆり、ハ、郎、を、披、て、流、石、心、洞、に、餘、り、密、通、の、悪  
 事、ある、を、知、と、云、た、ぞ、情、の、止、ま、難、き、命、を、捨、て、従、人、の、誓、理  
 を、尽、し、事、を、な、す、あ、情、の、あ、り、か、流、石、の、ハ、郎、も、此、絶、書  
 に、心、れ、娘、平、生、の、行、事、剛、く、て、容、顔、亦、世、に、絶、れ、と、れ、ハ  
 り、と、後、来、人、口、に、乘、る、と、て、も、ま、心、に、従、ふ、と、思、ひ、深、く  
 る、と、福、の、基、を、れ、く、と、う、う、す、返、書、徳、て、人、知、れ、を、矯、り、け、れ

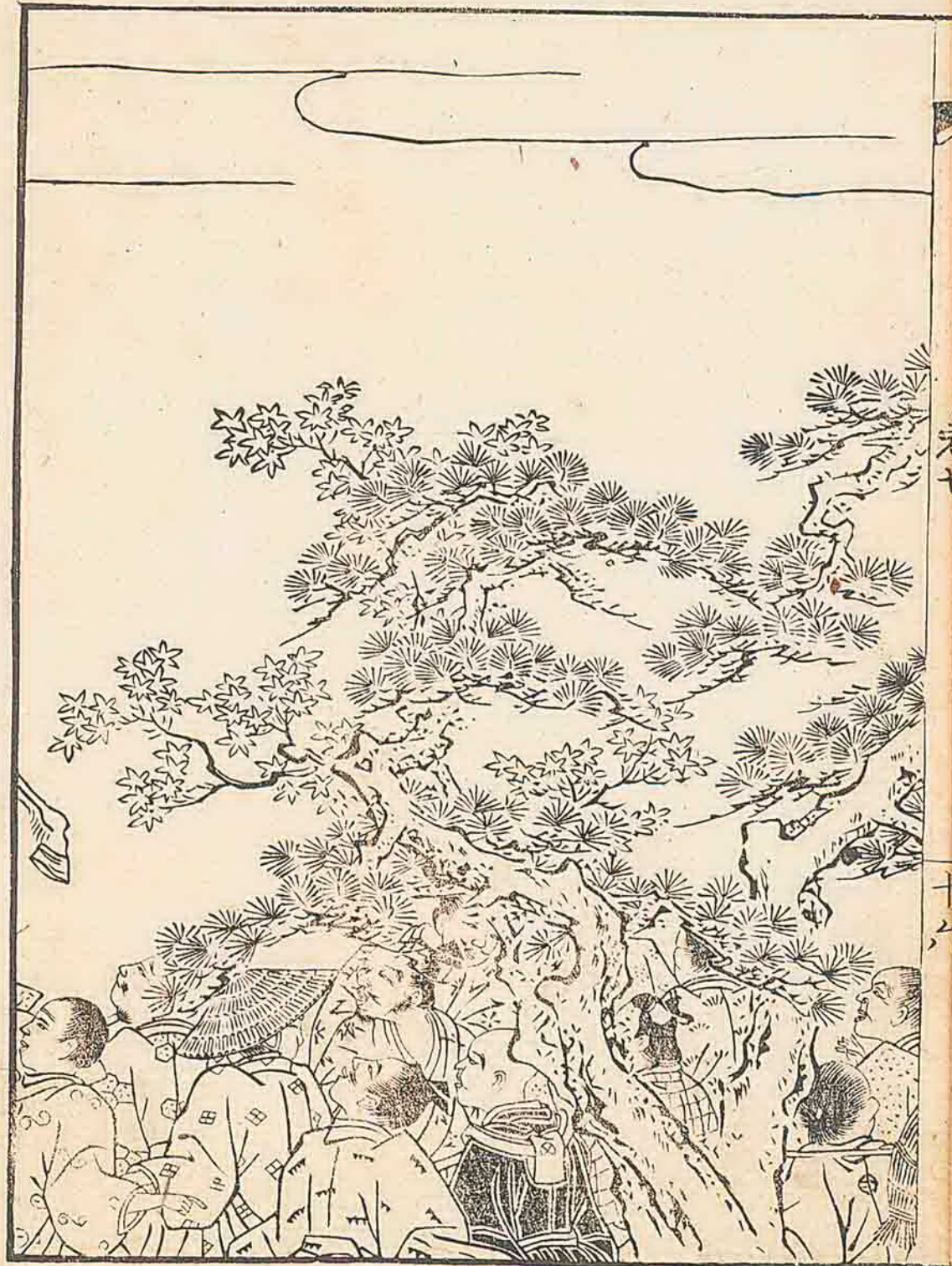
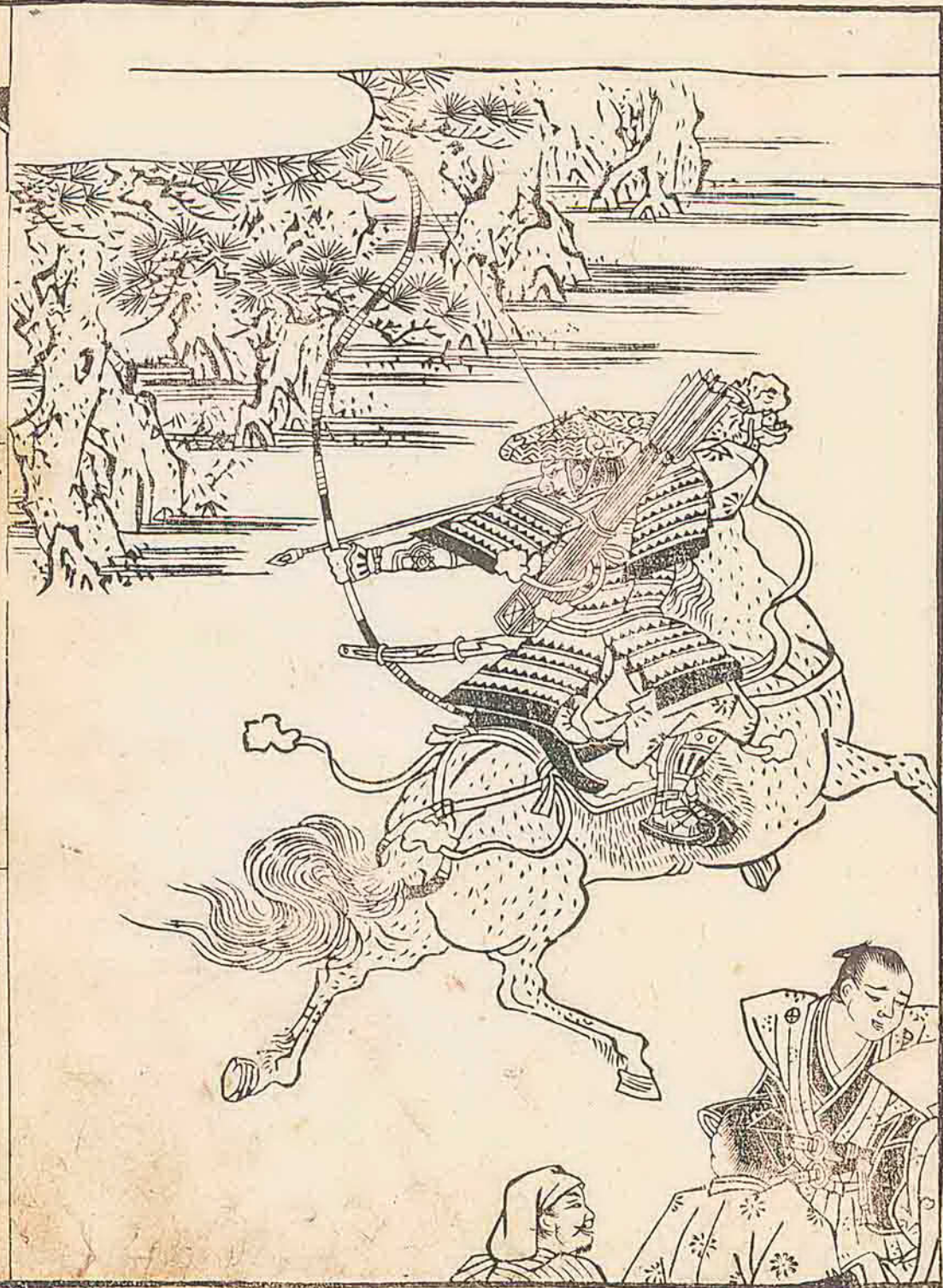
ハ娘ハ大に悦て。数日の禁れも一対小用け。是よりあ情を  
 て。車により真にふき。おをわたり。書を返りて。借光の約  
 定りぬ。此ハ三月上巳。忌木一家。曲水の宴ありて。諸人酔を  
 尽し。後小入て。停去ぬ。此回。仇讐の期ありて。娘。怒て。書院に  
 来り。ハ扇と相逢て。たに。心情を語り。一板を。お夜の禁。火  
 込て。それより。幾麻。塔。鸞。比。翼。の。如し。好ま。す。と。お。た。小。い  
 う。と。家。内。稍。と。事。を。痛。く。も。更。女。好。男。む。敵。と。あ。る。べ。し。と。妨  
 る。者。一。人。も。あ。く。知。て。と。媒。と。る。者。を。あ。は。れ。た。に。同。藩。云  
 宅。某。が。嫡。子。平。馬。と。い。ふ。子。を。お。せ。者。何。り。兼。て。荒。木。が。娘。の。絶  
 る。に。心。を。掛。て。折。ぐ。云。よ。れ。た。一。園。と。合。点。せ。す。父。に。お  
 て。内。藏。へ。云。込。夫。妻。と。せ。んと。す。れ。た。荒。木。亦。も。人。と。あり。を  
 悪。て。承。り。せ。せ。是。小。因。と。常。に。恨。を。含。む。ハ。平。馬。ハ。思。曲。孫。が

門人にて。同乳相承て。常に親りける。或時。典孫。平馬に  
 向て。足下。知。ぬ。ハ。む。や。荒。木。が。娘。こ。そ。山。形。ハ。扇。と。密。會。して  
 満。う。ら。ぬ。中。と。き。く。万。一。彼。と。妻。娘。と。を。ら。ハ。足。下。士。の。一。分  
 立。ま。が。き。そ。一。万。一。等。あ。れ。し。と。悪。の。腰。押。一。言。に。平。馬。好。情  
 頻。お。して。ハ。事。い。か。ある。處。さ。う。と。人。志。ま。さ。ハ。扇。を。切  
 捨。て。悪。の。意。趣。を。晴。す。へ。偏。は。君。の。助。力。を。頼。ふ。と。思。込。て  
 云。け。れ。ハ。典。孫。色。を。低。して。ハ。扇。が。武。勇。中。く。暮。く。う。多。際。に  
 來。る。者。を。あ。ら。す。う。ら。む。た。と。錢。仕。出。して。却。て。孫。を。取。あ。ら。バ  
 悔。と。思。ひ。し。只。芳。せ。す。して。飛。に。落。ま。手。取。あり。と。密。に  
 一。柵。を。叫。々。ハ。平。馬。大。小。悦。て。お。れ。より。あ。人。お。寄。て。荒。木。を  
 借。せ。り。城。主。の。妻。に。元。來。京。都。の。出。生。に。く。色。好。と。の。女。あり。  
 城。主。始。竈。あり。し。う。其。好。情。を。踏。ぐ。拈。ぐ。と。あり。ぬ。等。と。人

むぐめる女物のまごめられま時にとそ。悪念の手引と  
 ありぬ。去るに八郎が騎射の時。其苦量を見て。色好この  
 情より難て。度々艶書をかくれた。八郎是を去るの浮沈と  
 其度、封も不切。一々荒本へ渡しぬ。典膳平馬の角を去る  
 也。八郎が手紙をむそくに多ひ。彼女へ艶書を付しり。此保  
 ハハ女絶て城主へ達せし。去にど八郎が不義とならん  
 との巧あり。彼女ハ数度の文一度の返事もなければ。お  
 ら又希る所に。かゝる八郎が文に。猶とあきて。披見  
 るに。限りなく書は従ふ。備は去りし。文の達せりし。ら  
 我思の程を。知せん。と心のしけを書けし。て。自ら小指を  
 切て封也。彼媒よ。かたりぬ。彼者より。平馬に渡せば。案に  
 相遠して。披見るに。空恐し。誓をきて。末の松山波こまご

うまらじと書つらねて。小指を添て封しり。急ら典膳を指  
 と。これを讀するに。典膳笑を合て。時至れり。此文を城主性  
 来の廊下に。捨たぐへ。と云。教へ。近士の内後心の。お子に  
 兼て云。含め。おに。あきて。八郎が好色の病あると。を従しぬ  
 明月の光も。雲に掩れ。暫暗夜とある。城主一朝廊下にお  
 ろて。此文を捨の。あかんに。返書にて。其情。悉く。あする。文。折  
 見。知ある。妾の。お。指。を。れ。ハ。一。封。の。怒。止。ま。ご。こ。く。早。速。荒。本  
 を。取。て。八。郎。が。不。義。を。攻。ら。う。に。荒。本。心。得。て。先。達。て。の。艶  
 書。を。送。り。封。の。儀。差。出。り。八。郎。が。心。掛。め。は。と。り。上。る。い。や。く  
 此。文。件。ハ。返。事。あり。必。八。郎。が。方。より。文。を。送。り。し。と。た。か。へ  
 ら。り。と。急。に。彼。妾。に。せ。ゆ。り。て。彼。艶。書。を。揮。り。ゆ。て。荒。本。に。示  
 せ。荒。本。怒。り。て。彼。八。郎。が。手。紙。に。似。せ。れ。た。必。要。事。あり。





彼ら武術を以て者甚多とまゐる。必定彼等が仕業とて之を  
と申ければ。城主も滅にたあるとも阿らん。なれば。暫事の  
やうも伺んと。一旦事静るといふ。衆は金を採れば。荒木娘  
を以て。八郎の妻とふ。おに掛る不義を押し。せまをん  
と云立る。小あつて。城主信利なり。といふも。人口を塞ん。爲  
左あつて。八郎を他國へ送る。爲すと。何事をも申渡りけ  
れ。荒木も詮方なく。八郎に右のあやを相借し。何國へ  
去りぬ。んと伺ふ。八郎数日の恩を附し。海川下降。及て立  
歸んと。早々に旅立。七娘。愛の心地して。涙のこへ。ゆなく。  
妻へ入る。お郎ぬ。八郎思ひぬ。浮志を流し。心ちなく。山形を  
立出て。十里計。出でて。頼小荒木が娘の情。忘れぬ。むむ。  
もなく。細さ。橋に。かき掛り。ひらた。一町。よ。あれて。川中へさ

んぶと。あつ。むの。と云て。立上らんと。せし。所ふ。思も。あつ。と  
之。四人を。り。重り。水。申。は。て。あ。ん。なく。八。郎。を。搦。捕。引。き。り  
季。照。齒。を。み。をか。して。見。て。われ。八。郎。忠。典。孫。三。宅。平。馬。あ。つ。と  
ゆ。と。に。身。か。り。は。財。の。む。い。う。に。を。や。婦。女。を。能。て。好。色。の。謀  
を。廻。と。と。武。士。の。計。畧。と。懸。隔。なら。ん。幸。く。引。連。て。切。捨。ん  
と。と。それ。より。纒。を。増。し。引。立。て。白。河。領。に。を。く。深。村。あり。け  
る。中。へ。引。入。て。大。本。に。あ。つ。と。う。に。縛。付。二。人。ハ。民。居。に。入。て  
食。事。を。多。す。附。居。る。伴。同。ハ。郎。の。顔。色。を。つ。ら。く。見。て。君。ハ  
天下。の。美。男。あり。主人。を。う。ら。ん。人。知。れ。ど。君。を。殺。ん。と。ま。る。ハ  
無。乃。あり。然。を。君。を。押。も。時。ハ。君。身。妻。子。立。所。に。命。を。失。ふ。せ  
めて。云。置。と。あ。ら。ハ。傳。て。ゆ。い。ら。せん。と。い。ひ。ら。す。ハ。八。郎。眼。を  
閉。て。昏。り。し。う。大。小。脱。て。流。ら。ぬ。志。を。死。て。後。下。野。國

宇都宮に。長尾監物と云ふ人あり。此方へ山形八郎非業の  
死を遂とりと傳へられしと念以に頼む内にも馬典膳が  
来ていてやまに目以の替換を敷まへし家ハ意の仇業  
ハ業の仇討とて来れりと。た右より太刀引抜て。立ちかゝる  
今の山形が會佛鼎の魚の如くあり。時に大木の影よりも  
健ある矢を射る如くに欠出て。平馬典膳をたたく川さ  
のけ。仁王立に突立バ典膳怒て何者なれば科人の方人子  
すと。太刀ハ相に構て切らるるを。彼士完宗と云ひ。太刀抜  
へくこれに掛れば。典膳が太刀先右に乱れ。あま討  
んとする内に。うひらひて逃て行。追欠んとする所を平  
馬と云ふ。後より切わるるを。むらりと云ふ。真向河  
に切割て。立ぬて八郎が縄切かとけハ。八郎矢に驚て何人

をれハ。某が危難をまらひ。時に頼術の娘元人あり。姓名  
某と云ひ。いれハ。某ハ麻鳩。悪次郎と申す。のにて。長尾が  
時と我を信入。足利太尉との乃臣下と云れり。我君の命令  
は。貴前を尋て。りし。あり。先刻下部への物詰にて。山形  
殿と。知ゆらり。借も危と。仕合と。あ人大。懐て。彼下部に  
金湯を。ら。せ。荒木方へ。一。逃を。徳て。相。渡。山形に。この。始  
末。俱に。借れば。悪次郎。打。突。て。足下。の。黄。藤。行。る。ぞ。玉に。疵。を  
り。と。あ。人。借。方。に。立。出。んと。す。る。所。に。盗。賊。七。八。人。老。人。の。侍  
と。若。さ。女。を。引。連。て。引。立。行。有。根。見。あり。麻。鳩。堪。う。絲。て。死。掛  
て。二。三。人。を。投。の。け。れ。ハ。八。郎。も。同。く。あ。人。投。倒。し。や。を。を  
御。け。足。て。あ。れ。ハ。荒。木。の。息。女。並。善。代。の。家。来。あり。八。郎。大。に  
怪。ん。て。次。子。を。同。や。し。肉。藏。方。より。の。一。通。あり。娘。の。縁。に。よ

つて、い度中用取らざるをくやみ、慈慕の娘定をゆふとた  
 れた死を極めるゆより、一向き西へ送り、志操を述さそ  
 んと一人の家来に中付送りせむ由なり、娘ハ八郎を足る  
 よりも悲喜ともに至り、面付涙を流し、計也時に盜賊在二  
 回に立上り、切先を帯て切られ、悪次郎お知、く入て  
 久さよき慰とたちに愛附切あし、ゆきく、るに、四人の  
 盜賊八段とせり、く怪伏せ、八郎もいさんて切て出、是も二  
 人を切殺、ま回に一人の盜賊、荒木が娘に切掛るを、女も恐  
 る用意の刀引、抜てお殺付入て、腕お落し、あんぢく、とこに  
 切とめ、り、跡る奴原悪次郎追、追、跡らず切、控、立、ゆて娘  
 の働に感入、り、悪次郎お嫁にて、世所、よて、夫婦とせり、四人  
 一所にお連て、下野國へ急けり

長尾為明計畧那須勢敗軍事

爰に下野國烏山の城主那須壹政守政賢ハ、世々の名家に  
 て、武勇を國に懸けり、或時一族長臣を召集て、今我國の事  
 について、奥羽常陸の大敵と常に合戦し、殊に同國宇津郡宮  
 後綱と不快にして、稍もそれハ、闘陣に及んと、幸に信ね  
 の武勇に、あつて、家聲をた、た、世といふ、家計を以て、社  
 稷を安し、保んとせ、けれハ、伊王郡下総守を、出で、申け、家ハ  
 尚家の弓矢を以て、八方の敵に當て、た、これを、と、と、とい  
 へ、共、胸を、國を、家の、謀に、之、某、あり、よに、一人の、謀士を、得  
 て、國家を、維持、し、兵を、練、ら、し、家、長、之、の、基、を、た、んと、述、け  
 れ、ハ、大、回、系、山、城、守、これ、を、守、て、後、兵、の、異、見、突、に、准、備、あり、  
 名、士、遠、に、あ、る、某、密、に、あ、る、た、宇、都、宮、の、城、下、離、れ、よ、長、尾

監物為明と云る智謀名譽の賢人あり、天文を明らめ地理  
 に委く、軍畧古今に卓絶せり、自ら其智をうらめしめて、主人  
 の器用を撰んて、その力を養ふとなせり、此者万一後繼に  
 仕へて、控謀を廻らさば、頗る自家の害らるべし、諸將を  
 知りぬるやと云に、予常陸ゆづもあらず、某既にして者  
 を圖及へり、いづれ其智才の信疑を各人ぞ、何事なく、石  
 のひ其争を計て、賢あらう、争く勇へし不賢なるは、追放ん  
 と事もおげにやけふを、政賞とゆくと、圖面け、諸將の備を  
 る所、我も既にすかれり、然れども、く、石、呼く、来るべし、者と  
 賞を、兵士を撰んて、使者と申す、其心をこころみ、て、遊ハ  
 臣と申す、靜退せば、早く打捨て、後來の禍を除くべしと  
 有ければ、と將承て、君の上意、言に、主圖に付へり、と、徳士を

撰て、平野、主計と云る、毎日の士、小高物を多く取揃へ、使者  
 として、主計に振を引み、さして、後て、固奉左、清門に、百餘騎を、授  
 て、進と号して、里敷をへ、さして、さして、ゆせ、若長尾、祥退せば、  
 主計、立つて、固奉に、おれを、告げ、直に、押寄、て、油、の、所を、攻  
 撃、搦捕、て、来るべし、と、主計、悉く、備て、お士、既、に、打、さ、り、  
 敵、て、主計、の、道、を、急、さ、毛、尾、の、家、に、至、り、葉、田、を、請、け、れ、し、  
 市、に、通、し、監物、早速、立、出、て、懇、勤、に、挨拶、し、回、國、の、諸、侯、あり、  
 史、節、を、あ、ら、る、と、奉、望、の、至、り、と、云、け、る、お、主、計、取、あ、ら、し、  
 君、の、雷、名、を、國、に、高、く、主、君、不、肖、を、れ、た、賢、を、さ、し、能、を、愛、む、  
 何、卒、貴、所、主、君、の、懇、情、を、憐、み、一、臂、の、力、を、助、て、國、を、治、め、乱  
 を、制、し、國、民、を、安、育、さ、し、め、ら、し、と、某、に、命、し、て、伊、佐、仕  
 已、後、進、と、の、事、に、以、ち、形、く、ハ、守、屈、ぬ、れ、と、命、を、奉、り、述、け、る

に長尾隆之維有忍公の賢直に比へとも。兵書物のとにてな  
 る軍形申く大場へ押中して。全く勝利をばると我ら  
 らも号東あり。所なにいなる何方へも仕官の望なくあし  
 清深志の清直に浪人の某方一合我國事の評議不決と  
 あらふ其時寸志の密謀何程も申上へし。とて忍公の某務  
 屋の外抱られんとあらば早速御法仕へし。此等披家向  
 ふへしと。海面に赤色を懸く。海者とうそつて。跡以の  
 外輕忽あり。平野つらく板子を見て。誠は人ハ少と見との  
 相違あり。一時名をつまされ傷者あり。立向て此處相違  
 んと。面不終後をとりけらひ。候々の應答某通一取り届  
 たり。尚又忍公にふりて。清直不系多へし。と立歸れ。監物  
 ハ門前と送出て。門前の某尾直くと。偏の河を穿て。遙に見

送り立入れ。小楠末七郎不審氣に。先生の法挨拶。何れ果  
 かに。將不為い。ある分と。為れば。監物。幾て。今日の使者  
 ハ。吾れ。嘗て。ハ。家臣と。あり。領事。せざる。時ハ。押返して。大軍  
 にて。攻詰。討果。止。計畧。あり。たと。五。十。百。來。ると。も。物の。數  
 にあ。る。孫。氏。隱。使。に。事。を。濟。んと。淺。智。を。あ。ら。け。し。歸。し。り  
 と。送。り。れ。ば。小。楠。横。手。を。拍。て。う。く。も。さ。ば。り。あ。り。拍。子。給  
 れ。た。我。場。へ。出。て。た。百。抱。んと。あら。ば。何。を。う。ら。ひ。の。う。へ  
 さ。を。り。る。為。あり。必。途。申。の。討。ま。も。平。時。高。細。を。拍。後。那。使  
 由。で。ハ。立。向。ん。孫。氏。智。謀。の。將。あ。れ。ハ。い。川。り。り。と。掃。り。す。り  
 えず。討。子。を。差。向。ん。其。内。に。吾。く。ハ。此。所。を。立。去。て。一。色。と。二  
 色。に。あり。鐘。を。早。く。造。立。せ。と。未。終。に。足。ぬ。さ。て。後。に。れ  
 ハ。半。七。良。感。也。と。う。ら。ハ。旅。途。の。倦。し。せん。と。田。人。の。家。來

と家来をやり片付密に支度す所へ山形支由惣次良備  
 大不入来れハ長尾小楯大に悦山形の首尾乃海の危難を  
 奏く借れバ、そのハ那須家の物語急よ出立の松子語り  
 合ふ其内に劇陣喧嘩と騒動す小楯康清近出て見るに大  
 の男を去中に在因み、而の溢者十数人、驚くに懸岩の透  
 波の張本あり、只お教といひめいり。小楯半七良大將を  
 押合を寄て驚愕するく、色うられバ、彼男振返り酒面を  
 色あらしめ、長尾始末、而等密の使よ来る乃とく、尚  
 困の溢者、驚くに附ねらひ、爰に於て大勢とある。然在物立  
 ハ、やい、あ、く、ま、成、と、ま、ゆ、と、思、へ、と、も、ほ、と、を、述、ぶ、る、間、ハ  
 隠便ふぢんとと、ま、る、に、改、よ、あ、る、曲、者、た、り、も、や、貴、而、も  
 違ぬれバ、何を、り、ぞ、ん、長、途、の、言、れ、曉、に、一、く、首、を、懸、ん、と、

堀川家の如き、太刀むらりと抜て、立向へを、小楯も、た、に、抜  
 り、り、跡、小、ハ、麻、鴻、が、引、だ、と、ん、で、一、人、を、餘、と、下、と、驚、お、さ  
 る有柄小曲者共、遊易して、一同に地にひれ伏し、隙をを  
 ければ、二人、あ、れ、を、聞、届、高、細、ハ、長、尾、の、指、圖、に、備、う、せ、ん、と、  
 引、連、て、立、陣、り、驚、振、長、尾、に、や、げ、る、ハ、新、鎧、造、立、あ、り、て、主、公  
 義、連、已、に、使、給、あ、れ、ハ、其、取、始、め、山、形、小、楯、康、清、の、莫、士、早、く  
 集、會、あ、る、べ、し、との、命、令、あ、り、と、述、け、ま、し、ハ、長、尾、を、始、め、三、英  
 僅、で、あ、れ、を、取、り、思、命、あ、り、即、座、に、お、立、べ、し、以上、ハ、山、家、に  
 謀、を、務、め、た、き、那、須、の、人、數、に、目、を、さ、ゆ、さ、せ、ん、と、長、尾、康、清  
 權、之、助、に、ト、知、を、り、へ、傳、奉、の、十、七、人、に、金、封、を、取、せ、竹、符  
 を、渡、し、秘、計、を、て、く、春、邊、也、是、治、り、來、る、べ、し、と、云、付、た、き、  
 長、尾、小、楯、山、形、夫、婦、康、清、驚、振、の、食、事、う、く、個、て、係、に、懸、り、と、

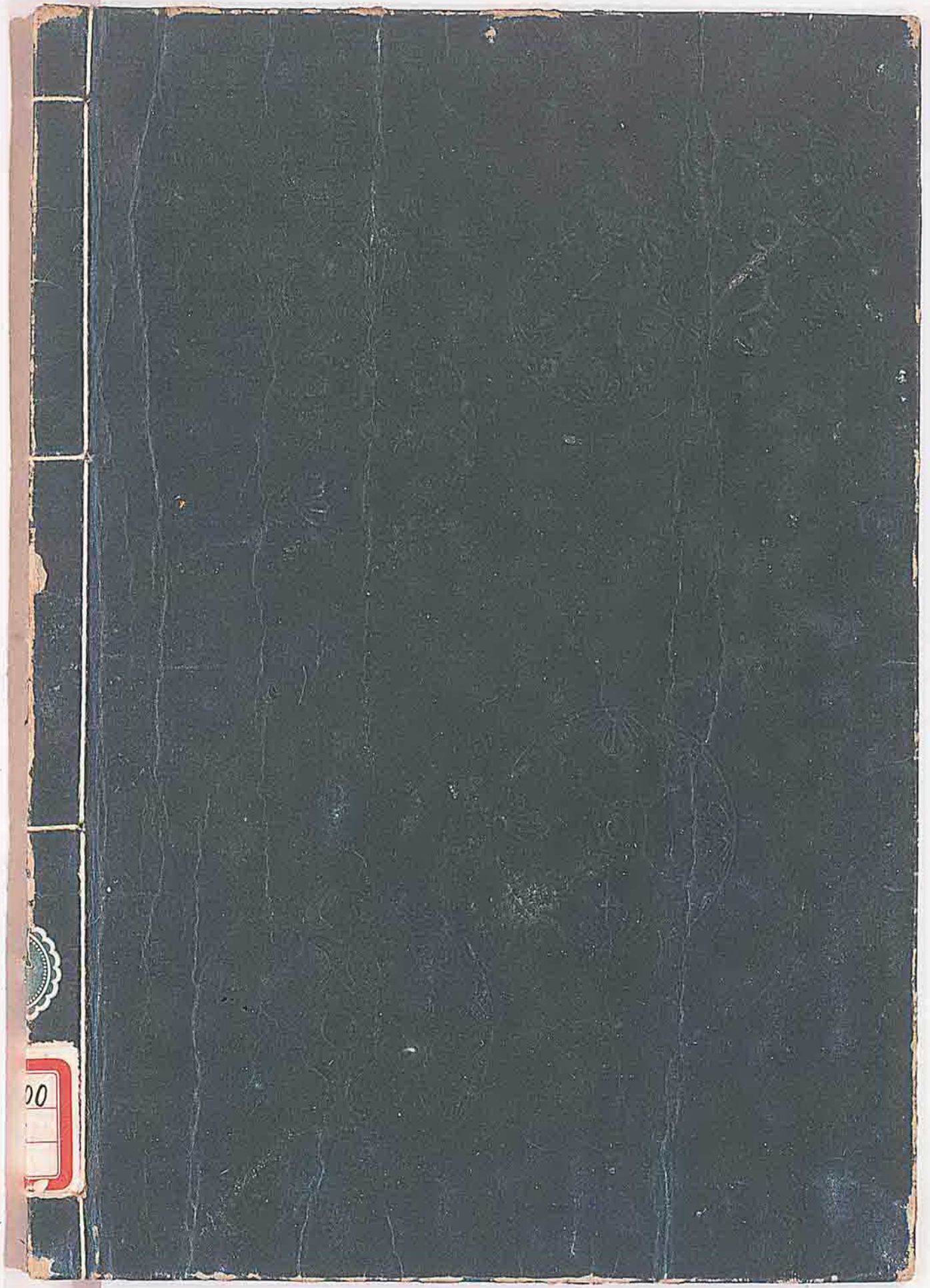
をひいて即日にお立ち寄り。去程に平野主計の長尾が宅より  
 里五ゆり。乃ち岡本に出會て。監物と志づる。喬細に語り。  
 お人室掃城して。其趣を祈れ。大田原大に務むる。幸うれに  
 中へ扱れ。此は風信を示し。追逐して討ちをせよ。是れ  
 に立退ん計畧あり。押逐て今宵の内。一搦お果せと。志づ  
 つく下志をなす。ければ。お人室掃城。出でて。おみにもんで  
 押寄せ。長尾の宅近くをれば。殿より更に及ぶ。本陣に  
 大音上て。長尾監物の頭家あり。両用まで。兵補にあり。是れ  
 乃常に懸掛れ。同音に呼はつ。家の内まで。高くと打突  
 ひ命知すの。愚人系。おれや。手並をみよ。と。云。是れに。際  
 ぶ。さうりと。押ひ。ければ。長尾と。見く。きく。一。る。子。年。一。居  
 たり。岡本下知。つて。誰。ある。阿。れ。お。と。れ。と。呼。ひ。れ。ば。赤

彦甚右衛門。獲て。去。一番に。欠。の。家。を。ね。ら。ひ。借。さ。る。鉄。炮  
 を。扱。て。放。せ。ば。赤。彦。胸。板。お。ぬ。れ。其。後。を。こ。に。任。れ。お。と。す  
 付。さ。る。鉄。炮。の。者。其。業。の。ゆ。り。と。ま。よ。ま。る。大。に。勢。お。し。ひ。る  
 む。取。に。守。都。宮。の。城。中。より。太。鼓。を。打。鐘。を。な。ら。し。二。百。騎。討  
 の。軍。勢。隊。伍。を。不。礼。押。出。せ。ば。赤。彦。は。是。に。勢。お。し。搦。合。を。め  
 合。ふ。其。所。へ。金。幣。を。切。て。放。せ。ば。數。十。の。矢。先。一。度。お。終。り  
 て。西。の。如。く。何。う。か。り。て。あ。ら。あ。ん。一。回。に。敗。走。し。三。町。計。退  
 て。一。川。の。邊。を。小。楠。に。とり。備。を。ま。ん。と。す。取。に。敵。の。内。を  
 一。聲。の。鉄。炮。を。打。出。せ。ば。四。音。に。太。鼓。を。合。内。で。相。圖。と。を  
 が。く。火。を。上。れ。ば。彼。の。邊。の。邊。の。影。も。て。も。一。回。に。火。を  
 上。て。太。鼓。の。調。子。を。録。川。次。守。に。を。寄。る。勢。に。大。將。始。り。勢  
 れ。あ。る。時。な。れ。ば。一。先。曳。と。い。ふ。程。を。お。れ。敵。一。崩。れ



つゆらるゝおれふと廿一人鯉波城作り立、太鼓を打つし。  
 木の根をくつき、奇兵を寄せ、那須勢兵、雷の落つるふん  
 地して人をいれをおて敷せし、且昔よりけり次第也。  
 以の俚語、那須の孤軍と云けるは、此我のとあり、是も尾  
 り謀にて、船渡より宇都宮を傾ふ為に、長尾を討と告し、人  
 數を多く出せりと云ふりし。城中へも長尾相尋、旗炮を  
 相圖に軍立あるへしと約儀して、諸こそ思のゆゑに、大勢  
 を送りけり。

83



00